



いのちの水

二〇一八年

三月号

六八五号

苦難の中から主に助けを求めて叫ぶと、
主は彼らを苦しみから導き出された。(詩篇107の28)

目次

・東日本大震災から七年	1
・大風の讃美	2
・失うもの、得るもの	3
・新約聖書における復活(その2)	3
・神の言葉の矢―詩篇64	7
・五千人のパンの奇跡	9
・お知らせ	
・集案案内	

東日本大震災から7年

7年前に、激しい地震とそれに伴う大津波によって、長年親しんだ郷里の自然は破壊され、多くの人たちが命を失い、兄弟、家族のつながりも断たれてしまった。

突然にして夫婦や親子のきずなが失われた人たちにとって、その喪失感はいかばかりであっただろう。

さらに、その大地震と津波によって原発が4基も大事故を起こして大量の放射能が降り注いだことによって、福島島の放射能の高い地域は、自然の山野が汚染され、生活ができない状況となった。

先祖代々の山や畑、そこで農業や酪農、林業等々、地域に深くしみ込んだ生活を続けて

きた人々にとってその大地、

自然が破壊され、職業も失われ、さらに人間関係も壊され、そして、なすべき仕事が無くなった虚脱感や郷里、家族を失った混乱し、受けとった多額の補償金によって、悪しき遊び、放蕩に身をもちくずしていった人もあるという。

そのように、原発の大事故は、人間関係も郷里も山野の広大な地域も、さらに精神も荒廃させていく。それだけでない。この事故は、はてしない歲月にわたって放射能の影響が残っていくという恐ろしい事態を生み出す。

目に見える山野は、緑美しい自然の宝庫である。しかし、そこには、抜き去りがたい放射能が深く大地に刻まれ、それが植物のなかに深く入り込

んでいる。

百年以上もかけて育てた一本二百万円もするような特別な赤松林―それを調べるとその材の深くまで放射能が入り込み、それらが以前のような状態に戻るには、百数十年もかかるのではないかと言われている。

そのような長期になれば、現在までずっと代々受け継いできたそうした林業も受け継ぐ人もなくなり、その産業は崩壊し、荒れ果てていく。樹木の内部、植物の花や茎に入り込んだ放射能は、枯れたり、倒れて腐食していくと、地面に落ち、雨によって流されて下流にも放射能の影響は及ぶであろう。

チェルノブイリ原発事故によって、燃料デブリは、事故後三十年を経てもなお近づくこともできず、人が近づくと死んでしまうほどであり、放置されたままである。

燃料デブリとは、原子炉の事

故によって溶け落ちた核燃料が原子炉のコンクリートや金属と混ざり合い、冷えて固まったもの。放射線量がとても高く、人が近づけない。

福島原発においても、燃料デブリには、人が近づくと短時間で死に至るほどの放射能神あると言う。

そしてそれを取り出す廃炉ということが言われているが、取り出してそのような高い放射能を含むものを日本のどこに移動させるというのであるうか。火山、地震も世界的に多い。アメリカや中国のような砂漠地帯もない。

そうした果てしない困難をふくむ原発は、大地震や大津波、大規模火山噴火対策、さらにはテロによる攻撃対象ともなるのであって、あらゆる点から見ても廃止するのが当然の道である。

そして、突然に、大地震、津波、原発事故、洪水等々の自然災害などが襲ってきてても、

それに耐えうる力を持つことがだれにとっても重要なことになる。

そのようなことは、単なる災害訓練では与えられない。

人間以上の力をもった神との結びつき、そしていかなる状況にあってもなお、励まし、悲しみや苦しみをいやしてくださる愛の神を信じてそこから神の力を受けることこそ、心の面において最善の備えとなる。

それは、たんに個人的な経験でなく、数千年の歲月、世界の無数の人たちが、ありとあらゆる困難に遭遇したとき、じつさいに支えられ、新たな力と命を与えられて生きてきた証しがある。

しかも、そのような力を与えられるためには、お金も学問や知識も必要なく、ただ神とキリストを信じるだけで与えられるのであるから、そのような道が日本にさらに広く知られていくようにと願ってや

まない。

大風の讃美

強い低気圧の過ぎ去るとき、大風が山の木々に吹きつけ、一夜の強風とともに降った雨のあと、美しい青色をたたえた大空を背景に山々が壮大なオーケストラを奏でていた。

無数の木々の数知れない葉や枝等々が、一斉に揺らぎながら、人間には到底できない音楽を生み出している。

大風も木々も葉もすべて人間の創造ではなく、直接の神の創造になる。

それゆえに、この大風による木々の讃美は、神の直接の指揮による、神の被造物による讃美である。

だれが聞こうと聞くまいと、その重々しい響きは四方に伝わっていく。

神は、最大の音楽家でもある。それゆえに、さまざまな人とその音楽能力を与え、彼らは

神からの靈感によって独自の音楽を生み出してきた。

自然の奏でる音楽は、人間を介さない、直接の神の生み出す音楽であるゆえに、人間の演奏する音楽以上に霊的で、無限の神秘がそこにある。ひとときも同じメロディーはなく、同じハーモニーはない。

今のこの限りなく変化のある音楽は、一刻一刻同じでない、二度と全く同じ音楽は聞くことがない。木の葉の触れ合う風の力や向き、相互の状況は、一瞬一瞬変化していくからである。

聞き入っていると、魂のさまざまな部分に響きが流れこんでくる。

これほど、独創的な音楽はない。それゆえに、人間の創った音楽はいかにすばらしい音楽といえども、何回も聞いていると飽きてくるが、自然から生み出される音楽には飽きるといったことがない。

無数の木々の枝やさまざまな

形、固さ、大小の大きさなどあるにもかかわらず、それらのおびたらしい木々とその葉の演奏は、まったく不調和でなく、驚くべきハーモニーがある。

旧約の預言者エリヤは、大風のあとに、神の静かなる細き声を聞いた。

大風と木々の生み出す音楽の背後には、神の静かなる語りかけが隠されている。

青く澄んだ大空、そしてところどころに浮かぶ白い雲、それらは視覚的ハーモニーであり、音楽である。

激しい雨のあとの強い風の吹き募る早朝、地上と大空全体が、人間には到底不可能な視覚と聴覚による音楽が奏でられている。

これらは、すでに数千年も昔に歌われたこと―音なくして世界に響きわたる神の言葉を思い起こさせる。

…話すことも、語ることなく

その声は聞こえなくとも
その響きは全地に

その言葉は世界の果てに及ぶ。
(詩篇19篇より)

失うものと得るもの

この世においては、人生の途上においてさまざまな大切なものを失っていく。

自分自身の病氣、また、老年になって大切な家族が重い病氣になったり、大きな事故や災害などにあつて次第に、かつての健やかな状態が失われていくこともある。

それが愛する家族であれば、日々接しているゆえに、忘れることはなく、その悲しみや苦しみは次第につのるであろう。

そして神への祈りは、心の叫びとなり、ときとして深い悲しみとなる。

失うことからくる心の痛みがある。

しかし、そうした悲しみのな

かから主を仰ぐとき、静かに言葉が響く。

さいわいなるかな、悲しむ者。その者は、主によって慰められるのだから―と。

失うものあれば、与えられるものがある。

健康がひどく失われていくとき、その悲しみは深まる。

そのときはじめて、聖書にある深い悲しみや苦悩が初めて実感されてくる。

そこから切実な祈りが生じ、求めることによってその苦しみに耐える力が与えられる。

神からの慰め―いのちの水の雫(しずく)が落ちてくる。

そのような悲しみに耐えてきた、あるいは耐えている人たちのことが近くなる。

そして、そこに人からでは与えられない、神による励ましと慰めの世界へと近づけられる。

一粒の麦が死んで、豊かな実りがあるという。

また、「わたしたちが神の

国に入るには、多くの苦しみを経なくてはならない」(使徒14の22)と記されている。

時として死ぬかと思われるほどの苦しみや悲しみの経験によって私たちは古い自分に死んでいく。

そのことを通して、人は、よき実りを生じるし、神の国が与えられる。

新約聖書における復活

(その2)

復活 この言葉だけを見ると、一般のキリスト者ではない人々は、キリスト教の特殊な教義だと思ふ人が多数を占めているであろう。

しかし、この復活すると訳された原語は、立つ、立ち上がる、起きる、目覚める、などごくふつうにたくさん用いられる言葉である。

そうした中で最も決定的な重要性を持つているのが、死者からの復活である。この原語が持っている意味―眠ったり、

倒れた状態から、立ち上がる、起きる、目覚める等々は、私たちの日常生活においてどれも重要なことと感じている。キリスト教は復活ということ

を罪の赦しとともに中心的な内容として持っている。私たちが倒れたまま、眠ったままの何もできない状態から立ち上がらせていただくこと―それはだれにとっても喜ばしい状態である。

精神的に倒れ、絶望的になって死のうと思っっている状態から、立ち上がることができたら、その人にとって生涯最大の出来事となるであろう。

また、何が真理なのか、価値あることなのか、生きることとは何のためなのか…永遠に続くものなどあるのか、絶対的な正義はあるのか…等々で何ら確信がもてない状況は、揺れ動く波のようであるし、他方、真理に対して眠っている状態である。

イエスがこれから逮捕され、そのあと十字架に釘付けられ

るといふ恐ろしい苦しみが待っている状況にあって、ゲツセマネで必死になって祈られた。そのとき弟子たちにも、少し離れたところで祈っておれ、と言われた。

しかし、弟子たちはみな眠ってしまった。このじつさいにあった出来事は、現代の人間も、みな眠った状態なのである―ということとを思わせるものがある。弟子たちに生じていることは、私たちにも生じていることだからである。

三年間もイエスに従っていく―家族や職業をも捨ててそうすること、弟子たちは、多大の教えを受けたであろう。

しかし、それでもなお、師であり先生であったイエスの最期に近い時期のイエスの命令にもかかわらず、弟子たちはみんな眠ってしまった。

一人も目覚めていることができなかった―この記述のなか

に、人間はこの世の真理に対していかに眠った状態にあるかが暗示されている。

現代がいかに危機的状況にあるかを知らうとせず、気づかず、自分中心の考えのなかに生きている。

それを目覚めさせ、この世に流されていくのでなく、埋もれてしまうのでもなく、立ち上がらせるのは何か、それはまさにキリストである。

キリストが受けていた復活の力―それは、どのような生活をしている人においても、必要なもの―。

キリストは、言われた。「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。」

（ヨハネ11の25）

春になって花々が次々に咲きこうしたあらゆる現象も、眠っていたものが目覚めることを象徴的に示すものである。

自然界の植物たちは復活をつねにあらわし、いたるところで新芽が出て、復活の叫びをあげるごとくに咲き誇る。

人間もそれと同様に、つねに復活の力をあらわし、霊的な新芽が出てくるのを示す―そのような道が前途に開かれている。

キリストを忘れるな！
真珠湾を忘れるな！（リメンバー パールハーバー！
Remember Pearl Harbor!）

これは、1941

1941年12月8日、太平洋戦争の開始となった日本軍の真珠湾（Pearl Harbor）攻撃によって、甚大な被害を受けたアメリカにおいて、その攻撃を忘れるな！覚えていこう、という合い言葉のようなものとなった。

これは、復讐とか反撃のスローガンとなったが、新約聖書にも Remember…! というのがある。リメンバー（remember）

という英語は、新約聖書の原語であるギリシャ語と同様に、忘れない、覚えておく、という意味とともに、思い出す、思い起こすという意味も持っている。

…イエス・キリストのことを思い起こしなさい。

わたしの宣べ伝える福音によれば、この方は、死者の中から復活されたのです。(Ⅱテモテ2の8より)

…Remember Jesus Christ, who was raised from death, as is taught in the Good News I preach.

キリスト教の最初の宣教のときに語られた福音(*)とはこのように単純明解なものだった。

キリストは死から復活し、いまは聖霊となっておられ、その復活の命を私たちもただ信じるだけで与えられる! という喜ばしいメッセージがこの単純な言葉に込められている。

そしてその福音を受けるためには、難しい学問も、経験も修行も、あるいは地位や肩書もいっさいが不要であり、人

の命を奪うような重い罪を犯してもなお、ただ、キリストは復活された、そしてそのことを言い表し、信じるだけで救われるというのである。

：口でイエスは主であると公に言い表し、心で神がイエスを死者の中から復活させられたと信じるなら、あなたは救われる。(ローマ10の9)

私たちは、歩いていても、電車やバス、あるいは車の運転中であつても、キリストを思い起こすことはできる。苦しいとき、悲しみや罪犯した涙のなかにもキリストを思い起こすことができる。

死に瀕しても唯一できるのは、そこから救ってくださる復活したキリストを思い起こすことである。

この福音が語られた時代は、多数の人たちが文字も読めず、本もなく、多くは一日中、労働をせねばならない状況にあつ

た。さらに、ローマ帝国においては迫害がなされ、恐ろしい拷問や猛獣に食わせられたり、十字架での処刑などもなされていた。そのような状況にあつても常になしえたことは、復活のキリストを思い起こすことであつたし、それが直接に救いにつながるという何よりも重要なことなのである。

現代の私たちも、このことはだれにでもできる。万人に開かれていく道である。

福音とは、この英訳(Good News)であらわされているように、その原語(ギリシャ語)では、ユー・アンゲリオンであり、ユー(良い)＋アンゲリオン(知らせ)であるから、「良き知らせ」というのが本来の意味である。

「ゴスペル(gospel)」という言葉も福音を意味する英語である。これは、もとの形が godspell、すなわち god(神)の spell(言葉、説教)であり、

「神の言葉」を意味する。

この世は悪しき知らせで満ちているが、この世界全体に、しかも数千年を経ても変わらずに良き知らせであり続ける内容ゆえに、良き知らせといわれている。

「福音」という語そのものは、聖書の中国語訳の用語をそのまま取り入れたのであり、現在も中国語訳聖書でそのまま使われている。

「福」とは、幸いを意味し、「音」は、おとずれ、音信、知らせを意味する語であるから、中国訳の聖書で福音と訳されたのであつた。

そして、この個所にあるように、二千年前に、まず第一に宣教されはじめたキリストの福音とは、「復活」を中心としたものであつた。

そして、その復活あるゆえに、キリストは、神と同じ力を与えられた御方であること、現在には神と同じ、聖霊となつて働いておられる。

そして、キリストの死が私たちの罪を担って死なれたというところが、旧約聖書（とくにイザヤ書53章）によってすでに預言されていたことであり、このこともともに根本的に重要な真理として、良き知らせとして告げ知らされるようになった。

私たちは復活してどのようになるのか。

それは、「死者の中から復活するときには、結婚することもなく、天使のようになる。」（マルコ12の25）と言われている。

また、次の記述は、より明確な表現である。

「キリストは、万物を支配下に置くことさえできる力によって、私たちの卑しい体を、ご自分の栄光あるからだと同じ形に変えてくださる。」（フィリピ書3の21）

キリストの栄光あるからだとは、何か。それは、神と同じ霊のからだであり、聖霊であ

り、愛であり、正義や真実そのものであり、美そのものでもあり、しかも永遠：そうしたいっさいを兼ね備えているのがキリストの栄光のからだである。

それは私たちが考えうる究極的な高い霊的な姿であるが、そのようなことが私たちに復活ののちに与えられる姿であるというのは、驚くべき約束である。

また、使徒パウロに示されたことは、次のようであった。現在の地上のからだとは別に天上のからだがある。私たちは、朽ちるものとして生まれ、輝かしいものに復活する。ひと言でいえば、復活のからだとは、霊のからだである、ということである。

（1コリント15の35〜49）
復活を意味する原語は、アニステーミとエゲイローの二つが用いられている。

この二つとも、ほぼよく似た意味である。立つ、立ち上がる、起きる、復活する、よみ

がえる等々に訳される。

日本語で、「復活」というと、キリスト教の死者の復活に関して用いられる著しくキリスト教的な用語であるが、その原語は、ごく一般的な言葉なのである。

エゲイローの用例。

・ヨセフは眠りから覚めると（マタイ1の24）

・天使が現れて言った。「起きて、子供と母親をつれてエジプトに逃げよ」（マタイ2の13）

・イエスが手を触れると、起き上がり…（マタイ8の15）

・国は国に敵対して立ち上がり（同24の7）

・三日目に復活する（同17の23）

このように、ごく普通の目覚める、立ちあがるなどに用いられるため、旧約聖書のギリシャ語訳や新約聖書を通して224回も使われている。

アニステーミは、アン（強調

の接頭語）＋ヒステーミ（立つ）であり、そこから立ち上がる、復活する、起きる等の意味に用いられている。

・立ち上がってイエスに従った（マタイ9の9）

・三日の後に復活する（マルコ8の31）

・寝ているから、起きて何かをすることは…（ルカ11の7）

この語も、やはりごく普通の言葉として旧訳と新約聖書では647回も用いられている。

このように、私たちが、聖書にかかわることで復活といえ、ただちに死者からの復活を連想するが、この原語は二つとも、立つ、起き上がるの意味でも多く用いられている。

さらにエゲイローは、さきにあげた引用でも示したように「目覚める」という意味でも用いられる。

じっさい、パウロの書簡にも、私たちは罪のために死んでいった。しかし、キリストによって共に復活させ、共に王座に

つかせてくださった。(エペソ書2の1、6)と言われている、罪赦されて新たな生活に入ることも復活という語が用いられている。(シユネゲイローこれは、シユン共に十エゲイロー)
これと同じような表現は、コロサイ書にも見られる。
：あなた方は、キリストとともに復活させられたのだから、上にあるものを求めよ。(コロサイ書3の1)

さらに、「自分自身を死者のなから生き返ったものとして神にささげ：」(ローマ6の13)とも言われていて、死も復活も、現在の私たちの生活のなかで、見られることだと霊的にも言われている。

このように、死も復活も、私たちの肉体が死ぬこととその後復活だけを意味しているのではなく、霊的な意味においても用いられていることをみると、新約聖書は、その全体が、死と復活を主題として

いるのが浮かび上がってくる。「狭き門から入れ、滅びに至る門は広く、命に至る門はなんと狭く道は細いことか」(マタイ7の13、14)と言われているように、これも、命とは滅びることのない永遠の命のことであり、死と復活の命のことが言われているのである。

キリストご自身も明確に言われたこと―再び来るということは、再臨と言われる。そして、新しい天と地になるという。

そのことも、古い天地が死ぬ―滅びるからこそ、新しい天地となるといわれるのであり、再臨ということも、この宇宙全体の死と復活が意味されているということができる。

このように、私たち全世界を取り巻く死の力に抗して、復活の力が、キリスト以前のはるか昔のアブラハムやイサク、モーセ、エリヤの時代から働き、現代の私たちの世界の一人一人の人間の間に、さらに

この世の終わりに至るまで、死の力に対してそれに勝利する復活の力が滔々(たうたう)と流れているのである。

神の言葉の矢、主によって喜ぶ―詩篇第64編

2 神様、悩み訴えるわたしの声を聞いてください。

敵の脅威からわたしの命を守ってください。

3 わたしを、悪しき者の計画からかくまってください。

4 彼らは舌を鋭い剣とし毒を含む言葉を矢としてつがえ

5 隠れた所からよき人を射ようと構え

突然射かけて、恐れもしない。6 彼らは悪事にたけ、共謀して罠を仕掛け

「見抜かれることはない」と言う。

7 巧妙に悪を計画し「我らの計画は巧妙で完全だ。人は胸に深慮を隠す」と言う。

8 神は彼らに矢を射かけ突然、彼らは討たれる。

9 自分の舌がつまずきのもとなり

見る人は皆、頭を振って侮る。

10 人は皆、恐れて神の働きを認め

御業に目覚める。

11 正しき人(主に従う人)は主を避け所とし、喜び祝い

心のまっすぐな人は皆、主によって喜ぶ。

これは短い詩であるが、はっきりとした一つの内容がある。

敵というのは、実際に人を傷つけたりというものや、奪いとったりとさまざまな敵があるが、ここでは特に4節にあるように、舌を鋭い剣として、毒を含む言葉を矢としてつがえて突然射かけるということである。

言葉にも非常に悪い力があるということ、この作者はよく知っていた。言葉にはいろいろな働きがある。私たちに、おいても、人間関係が壊れる

原因のひとつとして言葉がある。

一言でも余計なことを言ってしまうと、それが後に響いて、壊れてしまつて元に戻らないこともある。反対に良い言葉は何十年もその人の中に残り続けて、良い働きをすることもある。

聖書はこのような言葉の両方の力を最初から書いてある。神の言葉は絶大な力と影響力を持つている。人間の言葉ではなく、神の言葉があり、それは宇宙をも創造する力がある。

この神の言葉の力を知らない場合には、存在するのは人間の言葉だけということになる。そこから、人間同士が、悪い言葉―批判、非難、陰口などを投げつけ合うという状況が生じる。

この詩篇においては、敵が悪い言葉、毒のある言葉を反対者に投げつけている。

それに対して8節にあるように、悪意の矢を射るならば、神様はその者に裁きの矢を射つて討つ。5節と8節は対比して書かれている。神様は全く何もしない神様ではなく、御心であるならば全く同じ事を同時にすることができるとい

うことを、この詩を作った人は、経験から知っていた。人を殺すほどに、言葉は鋭い力を持つ。子どもにおいても、殴られたりはしなくても、悪意ある言葉によって学校に通えなくなることもあるし、実際に暴力を受けるよりも、もっと深いところで傷つくことがある。

言葉は矢のように飛んでいき、心に突き刺さることもある。間接的に誰かが自分のことを悪く言っていたと聞き、傷つくこともある。

だが、他方で、神様の言葉も遠くに飛んでいく。この詩篇も三千年も前に書かれたものだが、時間も空間も超えて人

の魂に矢が命中するように入り込むとき、そこに命が芽生える。

私たちが他者への悪しき言葉などを続けているとき、時が来たら裁かれて、周囲の人たちからも見下されるようになる。そして神の働きをみなが認めるようになり、御業に目覚める。それほど言葉の問題についても神は裁きをなされるということ、8、9、10節で強調している。

神がその御言葉の矢、あるいは光の矢を射ると、その矢を受けた人は、突然変えられる。パウロは迫害者のリーダーだったが、神が福音の火がついた矢をぱつと放つたら、パウロの魂に突き刺さって、燃え上がり、福音の最大の伝道師になった。神は裁くことも、また生かすこともおできになる。

この詩人は4、5節で分かるように、悪しき人からの毒のこもった言葉の矢を受けて、

苦しい状態にあったが、神の助けによってそこから解放されたという経験を持った。

そして、神が、そのような悪しき人に対して、その悪を滅ぼし、悔い改めるようにと、愛の矢を射てくださるのを待ち望む。

聖書に記されている神―悪を必ず裁かれる正義の神であり、愛と真実の神を信じない場合には、テロリストたちのように、自分たちが武力でもって滅ぼすという考えになる。そこが非常に大きな違いである。

悪い人は非常に巧みに悪を考えるから、見抜けないということが6、7節にある。しかし神は全てを見抜かれているから、時が来たらどんな秘密でしたことでも見抜かれる。

この詩の終わりにおいては、神がなされることは何が目的であるかが、記されている。

：人は皆、恐れて神の働きを認め

御業に目覚める。

正しき人(主に従う人)は

主を避けどころとし、喜び祝
い

心のまつすぐな人は皆、主に
よって喜ぶ。

神のさばきとは繰り返し神を
意図的に否定し、真理を踏み
つけようとするものに対して
その悪の力が滅ぼされること
である。

そのようなことも、人々が神
のなされることを見て、いか
に人間のわざをはるかに越え
てなされるかを思い知らされ、
生きた神、正義の神、そして
愛の神がそのようなことをな
されているのだと知らされる。
そして主を幼な子のように仰
ぐ者には、主によって喜ぶと
いう祝福が与えられる。

私たちの究極的なさいわいは、
健康や家族、あるいは災害や
政治の腐敗や社会状態にある
のではなく、天地創造をされ
た全能の神、愛の神ご自身を
喜ぶことができることである。

そのような喜びは、いかなる
事態となっても取り去ること
はできないからである。

それは言い換えると聖霊によ
る喜びであり、キリストもご
自分が十字架の激痛を受ける
苦しみの果てに殺されること
を知っていて、なお聖霊によつ
て喜びあふれたと記されてい
る。

またパウロが、「いつも喜べ、
いつも祈れ、感謝せよ」と説
いたのも、そうした主によつ
て喜ぶことをはつきりと啓示
とみずからの体験によって知っ
ていたからであつたし、この
言葉は、自分の病氣や家族の
不和や争い、孤独、仕事の不
調等々によって喜ぶことがで
きなくなっている人への福音
である。

いかなることになっても、な
お「主によって喜ぶ」という
道は開かれているのを知らさ
れる。



五千人のパンの奇跡

主イエスが五千人に食べ物を
与えられたという奇跡の記事
が福音書にある。

このような内容は、初めて読
む人にはとても不可解で、常
識的には、およそ事実とは思
われないから、古い書物には
よくある単なる伝説とか作り
話だ、とおもつて読み過ござ
れてしまうことも多い。

じつさい、わたし共の徳島聖
書キリスト集会の以前の代表
であつた杉友豊市さんも、次
のように言われたのを思いだ
す。

自分が初めて聖書に触れたと
きに、すばらしい教えだと驚
嘆したのは山上の垂訓であつ
た。これこそは、真理だと思つ
た。しかし、そのあとに続く、
海の上を歩いたとか、一声で
風や波を静めた、あるいは盲
人の目に触れるだけで見える
ようにした等々の内容につい
ては、なぜこんなことを書い
てあるのか、こんな内容がな

かったらよいのに：と思つた
とのことだった。

この五千人のパンの奇跡は、
四つの福音書にすべて書かれ
ているうえに、五千人が四千
人になるなど、よく似た内容
でも書かれてあり、計六回も
書かれている。このように繰
り返し記されている奇跡は、
ほかにない。

それは、この五千人のパンの
奇跡が特別な重要性を持つて
いるからである。

「これを聞くと」ということ
ばで始まっている。それは十
四章最初からの出来事、洗礼
者ヨハネが、殺されたことを
指す。

特別な神の預言者であつた
ヨハネが、無残に殺された。
なぜ、このようなことが起る
のか。神に特別に用いられる
人物だからといって、安楽な
生涯で終わるということは約
束されてはいない。

神の長い時間にわたる、大い
なる御計画のうちにあり、そ

の過程で、私たちにとっては
どう考えても分からない、不
可解なこともよく生じる。分
からないからこそ、信じるの
である。

目に見えない神など信じてい
ない、という人たちは多い。
しかし、そういう人も、毎日
の生活のなかで、さまざまの
ことを信じて生きている。

例えば、今日、大地震、大津
波が生じるなどと本気で思っ
たなら、地下鉄や高層ビルな
どには入らず、仕事などに
かずに安全なところへと逃げ
るであろう。しかし、そんな
ことは信じていないからこそ、
ほとんどすべての人は通常の
生活を続けている。

また、飛行機や列車に乗る場
合も、途中で災害や事故があ
るなどと信じていないで、安全だ、
自分が乗っているこの便には
事故などない、と信じればこ
そ、それらの交通機関を利用
している。

食物にしても、それに毒など

はいっていないと信じるから
何の気なしに美味しく食べて
いるのであって、あるいは毒
がはいっているかもーなどと
疑ったら食べられなくなる。

それゆえに、信じるというこ
とは、人間のあらゆる行動に
深くしみ込んでいたのであつ
て、そのようなさまざまなこ
とを信じているにもかかわらず、
目には見えない神を信じ
ようとはしない。それは目に
見えないからだ、という人も
いるが、それなら、心という
ものの存在はどうか。心は目
には見えない、だからそんな
ものがあるのを信じない、と
いう人はいない。

それゆえに、表面的な出来事
を見て、神はいないというべ
きではない。神は目には見え
ない、しかし、その愛はそれ
を求める人にははっきりと実
感できるようにしておられる。
イエスはヨハネが殺されたこ
とを聞いて、そのヨハネがイ
エスのために備えた道―十字

架の死に至る道を歩まれ始め
たのである。

イエスは、地位も権力もな
い。しかし、驚くべき力を発
揮した。その力の源はどこに
あったのか。

それは一人離れて祈る―その
絶えざる祈りの中でなされた。
「群衆を解散させてから、祈
るためにひとり山に登られた。
夕方になっても、ただひとり
そこにおられた。」

(マタイ十四・23)

祈りの中で悪と戦う。キリ
スト者の戦いは、悪の霊との
戦いである。そして祈りは悪
との戦いに勝利する力を受け
るときである。

主イエスは、群衆が飼う者
もない羊のようにさまようあ
りさまをみて、深く憐れんだ。
この「深く憐れむ」(*)と
いうことばの名詞形は「内臓」
を現す言葉でもあり、内臓が
痛み苦しむほどに憐れんだと
いう意味。

中国の故事に由来する「断腸

の思い」(**)という言葉は、
やはり非常な苦しみや悲しみ
を内臓が断たれるほどだとす
る表現である。それほどに深
く憐れまれたのである。

この五千人のパンという重要
な奇跡の出発点は何か。それ
は、主イエスが群衆を見て
「深く憐れんだ」からである。
このことばは、原語の意味か
らは内臓を現すことばであり、
主イエスは深い痛み、悲しみ
を体全体で共感された。

そして、その肉体だけでは
ない、魂の飢えや渴きを癒す
ため、満たすためにこの奇跡
を行なわれたのである。

(*) 深く憐れむと訳された原語は、
スプランクニゾマイ。それはスプラ
ンクノン(肺臓、肝臓などの内臓を
意味する語)の動詞形。

(**) 昔、中国の武将が船で行く途中、
ある山峡を渡ったとき、従者が子猿
を捕らえて船に乗せた。母猿が連れ
去られた子猿の後を岸伝いで長い距
離を追いつけた。ようやく船が下流
の岸に近づくと、母猿は船に飛び移っ

たが、そのまま死んでしまった。母猿の腹を割いてみると、腸がずたずたに断ち切れていた。この故事から、はらわたがちぎれるほどの耐え難い悲しみを「断腸の思い」と言うようになった。

そして、弟子たちに「自分たちでパンを与えなさい」と言われた。弟子たちは、パン五つと魚2匹しかない、と言ったのに、それを持って来なさい、と言った。そして、主イエスが祝福され五千人が満たされた。これは現代の科学的な観点からは到底あり得ないと思われるであろう。しかし、神は宇宙を創造した全能者である。奇跡を起こしうる方である。全能なる存在には、不可能はない。不可能だというなら、そのような神は全能ではないということになる。

そしてこの奇跡にはもうひとつの側面がある。それは、誰にでもなしうる、ということである。

主イエスは「あなたがたがパンを与えなさい」と弟子たち

に言われた。主イエスと同じように、弟子たちにもできるからである。主イエスはできないことはいわれない。パンを弟子たちに与えると、弟子たちが人々にそのパンを与えた。そしてつぎつぎとパンは増えた。

主イエスこそがパンそのものである。主イエスが祈って弟子たちにわたしたパン。それが多くの人を満たしていった。

そのような目に見えないパンのことは、以下の箇所で示されている。

：人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる』

(マタイ四・4)

口から入るパンをどれだけ食べても、真実や愛は満たされない。かえってこの現代の日本の飽食の時代にあって、全体としてみれば家族の愛は冷えていきつつあると言える。

人間にとって本当の食べ物とは神の言葉である。そしてその食物を提供していくことは、わずかのパンを持つていけば足りる。神の祝福を受けるなら、その手持ちのわずかのパンー神の言葉は驚くべき仕方でも多くの人たちを満たしていくからである。

こうした真理を示すためにこの五千人のパンの奇跡は、四つの福音書で合わせて6回も書かれているのである。

キリストから受けた神の言葉、いのちのパンを弟子たちは他者に与えた。まず、神様からのパンをいただく。神の言葉をいただく。そして、それを他者にも渡していく。そこに神が働き、霊的に飢えていた人が満たされていく。歴史的に二千年間、主イエスからまず受け取った人がまた、他者に受け渡していった。

神の言葉はわずかに見える。力なきものに見える。しかし、神の祝福があれば大きな力を

発揮する。それは五千人どころではない。過去二千年を見てもわかるとおり、無数の人を満たし続けてきた。

このように、五千人のパンの奇跡は、その以後の長い歴史における出来事の預言となっている。この神のことばの無限の増殖力は誰でもが受け取ることができる。

主イエスは弟子たちに「あなたがたが与えなさい」と言われた。しかし、彼らが持っていたものは少しのパンと魚である。それでは到底おびたしい人たちに与えることはできない。単なる人間の力では、そのようなことができなくて当たり前である。

しかし、主イエスは不可能なことをいわれない。できるから言われたのである。「あなたがたが、与えなさい。」これが長い歴史を現している。主イエスは歴史を通じて、パンを与え続けてきた。どんなに少なくても、神様の祝福を受

けたら、増えるのである。

「ここに大麦のパン五つと魚二匹とを持っている少年がいます。けれども、こんなに大勢の人では、何の役にも立たないでしょう。」(ヨハネ六・九)

とある。大麦は特に貧しい人たちの食事であった。そしてそれを持つていたのは、権力もお金や財産などのない子どもであった。はじめから、そのようなことには、まったく役に立たないものというほかはない。

しかし、その小さきものを神様が用いられるのである。

イエスから持っているわずかのパンと魚を差し出すように言われて、弟子たちは何をしたか。何もしていない。差し出しただけである。

その単純なところに主イエスの力が一方的に現われる。わたしたちは受け取るだけである。そしてそれは、食べてなくなるものではない、永遠に続く恵みである。

主イエスは「天を仰いで」祝福の祈り(*)をされた。

これは原語では「ユーロゲオー」であり「祝福する」ということである。これは聖書で五六〇回(**)も使われていることばである。神が人間にしてくださいることは「祝福」なのである。

(*) 新共同訳では「讚美の祈り」と訳されたが、大多数はここに記したように、「祝福して」と訳される言葉である。

(**) 旧約聖書のギリシャ語訳と新約聖書を合わせての数。

「神はそれらのものを祝福して言われた。「産めよ、増えよ、海の水に満ちよ。鳥は地の上に増えよ。」(創世記一・22)

「この日に神はすべての創造の仕事を離れ、安息なさったので、第七の日を神は祝福し、聖別された。」(創世記二・3)

神の祝福は今に続く。そしてこの安息日の祝福も、主日

礼拝として世界中で続き、そこに祝福がおかれている。主の名によって集まるところに、主イエスはいてくださるからである。聖書はすべてが祝福の書である。

主イエスが天を仰ぎ祝福の祈りをした。そして、そのパンを弟子が受け取り、つぎつぎと、手渡されていった。キリストの福音が、世界に伝わっていき、貧しい人が、癒され、救われていくことの預言となっている。与えられている小さい信仰であっても、神様が祝福されると、無数の人が満たされることになる。

一番になる必要もない。自分の弱さ、小ささを知り、何もできないものです、と主イエスを信じて仰ぐ。それだけで祝福され死んだあとまでも永遠の世界に連れて行ってもらえるのである。

このパンによって、すべての人が満たされた。主イエスのパンは人を満たす。

：主は我が牧者。わたしには何も欠けることがない。

主は私を青草の原に休ませ、憩いの水のほとりに伴い魂を生き返らせてくださる。

主は御名にふさわしく私を正しい道に導かれる。

死の陰の谷を行くときも私は災いを恐れない。

あなたが私と共にいてくださる。：

。私の敵を前にしても

あなたは私に食卓を整えてくださる。

命のある限り、恵みと慈しみはいつも私を追う。

主の家に私は帰り、生涯、そこにとどまる。」(詩篇三篇)

人は、さまざまの娯楽、快楽、スポーツ、旅行、学的研究：どんなことをしても、満たされなかった心が、主が導き手となれば、満たされるようになる。

「主の聖なる人々よ、主を畏れ敬え。主を畏れる人には何も欠けることがない。」(詩

篇三四

このように、主に求める人には欠けることがない。

残ったパンは12の籠にいっぱいだったという。それは12という完全数であり、神さまに祝福されたものは絶えず残り、それがまた、完全な形で伝わっていくというこの預言ともなっている。

「私の肉がいのちのパン」と主イエスは言われた。この言葉の意味は、主イエスを霊的にいただく。言い換えれば、聖霊をいただくとき、何かが欠けているーという気持ちが消えていく。そのような欠乏感は、どのように人々からほめられてもまた健康や家庭に恵まれたとしてもやはり魂の奥深いところで存在しつづけるのである。

しかし、キリストが私たちの導き手であるなら、いかに重荷があっても、経済的に欠けていても、病気でも、その苦しみのなかにありつつ、心の

深いところで何か満たされている、と感じる。イスラエルの民が砂漠を歩むときの食べ物にはマナだった。それは、今

今は霊的なキリストそのものとなっている。それが、私たちのいのちのパンになっている。そして、それがなくなつたと感じたとき、この世の表面的な食物によってかえって欠乏感を強められるとき、求めたら、天からのマナ、パンをいただけるのである。それは歴史を通して現されてきた。私たちの生活の中にも、日々、そして生涯、このいのちのパン、主イエスの霊を受けて歩んでいきたい。

： 渴きを覚えている者は皆、水のところに来たれ。銀を持たない者も来たれ。

穀物を求めて、食べよ。来て、銀を払うことなく穀物を求め、価を払うことなく、ぶどう酒と乳を得よ。：

私に聞き従えば、良いものを

食べることができる。

あなたたちの魂はその豊かさを楽しむ。」(イザヤ55・1～2)

命のパンはただで与えられる。そして深く受け取った人は、他者に分かとうという思いが与えられる。このパンの奇跡で、二千年も昔に、キリストが「あなたの方の手で与えよ」といわれた言葉が、現在の自分自身に言われたもののよう

に、私たちの心の内で響くときが来る。

飽食の時代、しかし、神のことばの飢饉、今の日本がまさにそのような状態である。

私たちも、この命のパンを求め、そして他者に分け与えていく者でありたいと願う。

お知らせ

第44回 キリスト教(無教会) 四国集会 一片岡篤信兄の記念を兼ねてー

○日時：2018年5月20日

(日) 午前10時～16時

○会場：高知県婦人会館

〒780-0844 高知市永国寺町6-19 電話 088-872-1434

(高知駅から約1.5キロ、会場近くに有料駐車場あり)

○主題：「永遠の命」

○プログラム

開会挨拶と主題について…

片岡典子 (高知)

聖書講話 吉村孝雄(徳島)

感話(聖書講話に関して)

祈り

昼食・休憩

聖書講話 原忠徳(高知)

讃美、自己紹介、感話(聖書講話に関しての感話も含む)

(約2時間)

祈り、讃美

閉会挨拶 (高知)

○申込締切 5月12日(土)

申込先 高知市百石町2丁目

13-10 片岡 典子

電話 088-831-0906

E-mail:

k-nokochan@me.pikara.ne.jp

(ただし、徳島県内の方々は、吉

村孝雄宛に申送ください。まとめて片岡姉に送ります。)

会費 二千元(昼食弁当代、会場費)

持参するもの 聖書、讃美歌、新聖歌。

駐車場:会場には10台余駐車可能。近くに有料駐車場があります。

お知らせ

○イースター特別集会

四月一日(日) 午前十時から午後二時まで。徳島聖書キリスト集会にて。会費は、昼食代金として五百円。申込は、左記の吉村孝雄まで。

○四月の阪神方面の吉村(孝)が聖書講話を担当する集会

・阪神エクレシア・四月八日(日) 午前10時~12時。場所は、神戸市の元町駅から五分の兵庫県私学会館。

問い合わせ 川端 紀子
電話 078-578-1876

kawabata@kjd.biglobe.ne.jp

・高槻聖書キリスト集会

四月八日(日) 午後二時~四時。場所は、高槻市塚原5-8-5 那須佳子宅で個人宅に集会場が併設されています。

lmyrmys@yahoo.co.jp
電話 090-1585-5720

○明けの明星

夕方6時半ころには、金星が宵の明星としてその強い光を見せ始めています。

(ガリラヤ湖)



徳島聖書キリスト集会案内

・場所は、徳島市南田宮一丁目一の47 徳島市バス東田宮下車徒歩四分。

(一) 主日礼拝 毎日曜午前10時30分~11時30分。 毎月第四火曜日の夕拝は移動夕拝。(場所は、徳島市国府町のちのさと作業所、吉野川市鴨島町の中川宅、板野郡藍住町の奥住宅、徳島市城南町の熊井宅の4箇所を毎月場所を変えて開催)です。

・水曜集会: 第二水曜日午後一時から集会場にて。・北島集会: 板野郡北島町の戸川宅(第2、第4月曜日午後一時より。北島夕拝は第二水曜日夜七時三十分より)

・天宝堂集会: 徳島市応神町の天宝堂はり治療院(網野宅)、毎月第2金曜日午後8時。

・海陽集会、海部郡海陽町の讃美堂・数度宅(第二火曜日午前十時より)。

・いのちのさと集会: 徳島市国府町(毎月第一木曜日午後七時三十分より「いのちのさと」作業所)。

・藍住集会: 第二月曜日の午前十時より板野郡藍住町の美容サロン・ルカ(笠原宅)。

・小羊集会: 徳島市南島田町の鈴木ハリ治療院にて。毎月第一月曜午後一時。

・つゆ草集会: 毎月第四日曜午後一時半。

・徳島大学病院8階個室での集まり。

・第四土曜日の午後二時からの手話と植物、聖書の会、問い合わせは左記へ。

今回は、いろいろの理由から、日帰りの四国集会となっています。高知聖書集会の代表であった片岡篤信兄が、2017年5月6日に、半年ほどの闘病の末、64歳の若さで召されました。その片岡兄を記念しつつ、四国集会を開催することになりました。

キリスト教四国集会は、44年目となるのを思い、長い歳月にわたる主の導きを感謝をもって思い起こします。

著者・発行人 吉村孝雄 〒773-0015 小松島市中田町字西山九一の四 電話・FAX 0885-32-3017 「いのちの水」協力費 一年 五百円(但し負担随意)郵便振替口座 〇一六三〇一五―五五九〇四 加入者名 徳島聖書キリスト集会 協力費は、郵便振替口座が定額小為替、または普通為替で編集者あてに送って下さい。(これらは、いずれも郵便局で扱って下さる。) E-mail: pistis7ty12@hotmail.com